

つておらず、父の玄順が隠居留守番ということ十五人扶持と書かれている)、文政十一年に帰国して七年後の天保九年(一八三八)に死亡している。

この市川隆甫は京都往復の途中、沼津で知合った地方医師の頭之と文通を重ねていたところ、弟の蘭好が死去したので、隆甫は頭之を藩医に推せんし、頭之は仕官して市河魯庵と名づけた。そして天保三年、五十二歳の時、長崎へ留学し植林栄建に蘭学を学び三年後帰国した。しかし天保八年(一八三七)に五十六歳で死亡した。困った隆甫は、魯庵の後妻の連れ子・湯山家次男貫太を養う形とし恭斉と名のらせた。ところが翌年隆甫が死亡したので、恭斉自から市河家を継ぎ、市川隆甫のあとに中村家より栄達(藩医中村見外の次男か)を迎え入れた。

市河恭斉も早死で弘化四年(一八四八)三十七歳で他界、十三歳の玄智(明治に入り顕道を名のる)が後を継いだ。この玄智の先祖書並に神奈川県史料第五卷四二八頁に、この玄智が市川隆甫に学び後に佐倉の佐藤泰然の門下となり、明治九年(一八七六)に小田原梅毒病院医員と記されている。即ち、市川隆甫は二人おり、多分、中村家から入った栄達が二代目を名のっていたと思われる。

相州小田原では、明治に入ると青年達は急速に英学の方に傾き、蘭学の芽は市川、市河家以外にもあったにも拘わらず、遂に根づかずに終ってしまった。

小田原の医療というと、外郎家があげられるが、ここは私事では宇野藤右衛門を名のり、一族中から藩校集成館の教授を多くだしており、市川蘭好の墓誌をかけた宇野懐徳もその中の一人と思われ、市河家とも縁戚があるらしいのである。小田原の宇野家も二家あつて、なかなか難かしいが今後の課題である。

以上、市川、市河両家を中心に報告した。

(二〇〇二年六月例会)

***** 紹介*****

杉浦 守邦 著

『カルテ拝見 武将の死因』

武将が政治の実権を握るようになると、武将の病氣や死が政治や治世に大きく影響するようになった。そのため、武将の病氣や死因には多くの脚色がなされた。特に江戸時代に書かれた史料は、それぞれの大名家の思惑などで、事実と反して美化したり、英雄譚にしているものが多い。黒田如水の例がその典型であろう。

貝原益軒撰の『黒田家譜』では、如水が福岡で病死し、福岡の崇福寺に葬られた。死期が迫った時、子の長政に遺言し、辞世の歌を詠んでいると書かれているが、これらの話は皆作

られた話であると著者はいう。根拠として如水が死んだのは京都の伏見であり、黒田家墓地移転の時、崇福寺の如水の墓からは何一つ掘り出されなかったことをあげている。

如水は生前、洗礼を受けたキリシタン大名だったため、キリスト教弾圧政策をとる徳川幕府に配慮して如水の事績を「いっさい消滅し去られた」と著者は考えている。

如水は荒木村重を説得するために伊丹城にいったが、地下牢に長く監禁された。そのため足がなえたと一般に伝えられているが、これは伊丹城滞在中に梅毒性骨髄炎を発病し動けなくなったためと著者は見ている。

著名人の病気や死因を調べ研究する「病跡学」についての本を王丸勇氏は『英雄医談』『英雄・天才のカルテ』と題して著しているが、若干杉浦守邦氏と違う見解を出している。例えば上杉謙信の死因を杉浦氏は食道癌としているが、王丸氏は食道癌は合併症であり死因は脳卒中である。源頼朝の死を王丸氏は外傷性遅発性脳卒中としているが、杉浦氏は落馬の外傷による破傷風と分析している。

本書を見ると、扱っている武将二六名の死因の中で、胃癌と梅毒が多いのに気付く。胃癌は平重盛、毛利元就、武田信玄、丹羽長秀、徳川家康、伊達政宗、徳川家光、徳川光圀の八名。梅毒は前述の黒田如水、結城秀康、加藤清正、浅野幸長の四名である。結核は意外に少なく、北条時宗、片桐且元の二名だけである。

他に、平清盛、北条泰時、足利尊氏、蒲生氏郷、豊臣秀吉、

前田利家、池田輝政、浅野長政、徳川秀忠、徳川吉宗を扱っているが、日記や手紙などの史料を検証し、通説の死因や病気に批判を加えていて興味深い。

(蔵方 宏昌)

〔東山書房、京都市中京区西ノ京小堀池町八一二、電話〇七五一八四一—九二七八、平成十二年八月二八日、B五判、四一七頁、定価二〇〇〇円(本体)〕

坪井 良子 著

『日本における義肢装着者の生活援護史研究』

手足を失った人にとって義手・義足は日常生活に欠かすことのできない補装具である。本書は明治期から第二次世界大戦前までの約八十年間に義肢を装着した人々の歴史を生活者の視点からとりあげたユニークな医史学書である。

内容は五章で構成され、序章で問題提起、第一章は四肢切断者の生活問題と義肢の出現、第二章では義肢生活者の社会問題化と義肢供給システムの形成、第三章に義肢装着者の生活問題と義肢供給システム、そして終章に考察と今後の課題が語られる。こう記すと固い本のように思われるが、内容は平易な文章でわかりやすい。そもそも執筆の動機が、著者の指導していた学生が悪性腫瘍で下肢切断のやむなきにいたり、その後のケアをどうすべきかにはじまるというだけあつ